

氏名(本籍)	は とり けん じ 羽 鳥 健 司 (群馬県)		
学位の種類	博 士 (心理学)		
学位記番号	博 甲 第 5064 号		
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	困難体験受容における肯定的意味づけに関する心理学的研究		
主査	筑波大学教授	医学博士	小 玉 正 博
副査	筑波大学教授	教育学博士	田 上 不二夫
副査	筑波大学教授	文学博士	松 井 豊
副査	筑波大学教授	博士(心身障害学)	前 川 久 男

論文の内容の要旨

(目的)

本研究の目的は、人々が対処困難な出来事を受け入れる際に内的に行われる認知的および感情的処理過程である「意味づけ」に着目し、その意味づけのプロセスを明らかにし、それが精神的健康にどのような影響を与えるのかについて実証的な検討を行うことであった。その際、対処困難な出来事に対して行われる肯定的再評価を表す「積極的困難受容」、困難な出来事を経験した後に感じる成長感を表す「困難後成長感」という新たな概念を提唱し、この2側面から意味づけを捉え、その特徴と関連性について明らかにすることを目的とした。

(対象と方法)

本研究は第1章、第2章で理論的検討を行い、第3章から第5章で10の研究課題を設定し、その実証的検討を行った。研究方法は、一般青年(大学生および予備校生)1,291名(男性594名、女性694名、不明3名)を対象に、質問紙調査および実験的介入面接を実施した。

(結果)

第3章では困難な出来事に対する肯定的再評価について、主観的 well-being への影響(研究2)、「積極的困難受容尺度」の開発と信頼性、妥当性検討(研究3)、抑うつに与える影響(研究4)、積極的困難受容と精神的健康との比較検討(研究5)を行った。第4章では「困難後成長感尺度」の開発および信頼性、妥当性検討(研究6)、抑うつに与える影響(研究7)、対人ストレス経験の利得面の記述が精神的健康に及ぼす効果(研究8)など、困難経験後の成長や変化を表す意味づけを検討した。第5章では受験ストレス環境に対する予備校生の積極的意味づけ過程(研究9)、対処困難な出来事体験後の意味づけ過程の抑うつへの影響(研究10)について検討した。その結果、①困難な経験に対する積極的困難受容は、困難後の精神的健康を維持、増進すること、②困難後成長感も同様に困難後の精神的健康を維持、増進することが示された。その一方で、③困難後成長感は心配や苦悩などのネガティブ感情を減少せず、④開示抵抗感も減少させなかった。さらに縦断的検討により、⑤困難経験後の積極的困難受容が数か月後の困難後成長感を促進し、困難後成長感が抑うつを抑制するという結果が得られた。最後に第6章では、総合的考察として、本論文の意義、

限界、今後の展開が論じられた。

(考察)

本研究では、「積極的困難受容尺度」「困難後成長感尺度」という尺度を開発した上で、これらの尺度を用いて得られた知見から、対処困難な出来事に対する意味づけ過程は、肯定的再評価が成長感を促進し、その結果として精神的健康が維持、増進されるという過程を経るという一連の内的処理過程があると解釈された。しかし、本論文における調査や実験は横断的調査が中心であるため、意味づけが必ずこのプロセスをたどると結論づけることはできない。今後は、他の概念との関連、慢性疾患者や死別経験者等のような具体的な困難状況に置かれている人々、意味づけと身体的健康との関連等を検討する必要性が挙げられた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、自然災害や PTSD、親密な人の突然の喪失といった即座の対処が困難な圧倒的出来事に遭遇した場合、人々はどのようにその状況を意味づけ、適応するのか、その個人の内的処理過程はどのような要素と特徴、機能を有するのかについて検討しようとしたものである。申請者は、本研究において「積極的困難受容」と「困難体験後成長感」という2つの新しい概念を提唱し、調査研究と実験的面接介入を駆使して、知見を積み重ねながら堅実な問題の実証化を試みている点は評価できる。特に、内的処理過程を検討する上で、時間的要因を適切に研究方法の中に展開することは不可欠であるが、予備校生という適切な対象者を得たうえで短期縦断調査を行い、興味深い成果を得ることが出来たことは特筆できる。特に、従来の研究の多くが災害被害者など、研究倫理上実施困難な対象であることが多いため、回顧法などの方法論的制約があるのに対して、本研究では予備校生という心身とも健常な範囲にある対象者に前向き調査を行った着眼点の独創性を高く評価できる。反面、対象者が大学生中心であることなど、得られた知見の一般化には慎重にしなければならない。今後の課題としては、異なる発達段階の対象者と多様な困難な出来事を抱えている対象者を得るなどの努力により、更なる知見の吟味を行うことが期待される。以上のことから、本研究は博士論文として十分な水準に達するとともに、十分な学術的価値を有するものと判断できる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。